滋賀・慈恩寺遺跡

1 所在地　滋賀県蒲生郡安土町大字慈恩寺
2 調査期間　一九八二年（昭57）九月～一九八三年二月
3 発掘機関　滋賀県教育委員会・㈶滋賀県文化財保護協会
4 調査担当者　石橋正嗣
5 遺跡の種類　集落跡
6 遺跡の年代　古墳時代前期・室町時代
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

慈恩寺遺跡は、現在の安土浄厳院付近に所在した慈恩寺の跡と推定される遺跡である。慈恩寺は、近江守護佐々木氏頼が母の菩提を弔うため、延文・康安年間（一三五六～一三六二）に建立したと伝える。応永一七年（一四一〇）一〇月に守護佐々木氏が慈恩寺に年貢半分を寄進するとした文書の中に「守護方私寺」とあり、佐々木氏の菩提寺であった（「東寺雑掌申状案」〈東寺百合文書ル函一二一号〉）。しかし、戦国時代以来しばしば兵火にさらされ、最後は織田信長の近江侵攻により廃寺となったという。

（近江八幡）

一九八二年に県営圃場整備事業に伴い発掘調査が行なわれ、慈恩寺に関わる遺跡の検出が期待された。しかし、調査地域からは、寺院に関わる明確な遺構の検出はなく、室町時代とみられる大規模な池をはじめ、溝・井戸などが検出され、これとは別に古墳時代前期の竪穴住居一三棟と土坑が検出された。出土した遺物は、室町時代に属する大量の土師器皿・陶磁器類・瓦類・石製五輪塔と柿経とみられる木簡、及び古墳時代前期の古式土師器である。柿経を含む室町時代の遺物の大半は、池より出土した。

柿経の出土した池は、土層・出土土器などからその形成時期を二時期に想定でき、それぞれの時期に柿経が伴い、東・西二カ所より出土している。

東側の地点からは細幅で両面に写経の施されたものと、同じく細幅で、片面にのみ写経の施されたものの、二種類が出土している。一方、西側の地点からは幅が広く、片面にのみ写経の施されたものが出土している。これら三種類の柿経は、いずれも木目のまっすぐ通ったヒノキを使用しており、頭部は圭頭状である。頭部左右に切り込みは認められず、二〇本一把で根元を紐でくくったものや、いくつかの経巻をまとめて「タガ」をはめた状態にあるものも認められなかった。なお、今回出土した柿経のうち釈読できたものは、合

計三七九点である。

柿経は、池跡の東西二カ所で検出したものであるが、そのおのおのに関連遺物が認められる。まず、東側の地点の細幅両面写経の柿経に伴うものとしては、木製の小塔があげられる。これは一材からなっており、総高わずか八・七㎝と小型のもので、方形の基礎部の上にふくらみをもった球形に近い塔身部とその上に笠部、さらに笠部の中央より棒状の突出を作り出しているが、全体的に腐蝕が著しいため塔の種類は判断しがたい。ただ、この突出部が五輪塔の空・風輪にあたる部分で、腐蝕によって棒状になったと考えるならば、奈良の元興寺極楽坊や当麻寺にその類例が認められ、鎌倉時代から室町時代にかけてのものといえよう。

次に、西側の地点の広幅片面写経の柿経に伴う遺物としては、土師皿と瓦質の火舎があげられる。土師皿は退化ヘソ皿の形態を残しているもので、底部外面中央にわずかながら凹みを有し、口縁端部付近に一条の沈線が入るものである。沈線は有するものの、底部の凹みは認められない。瓦質の火舎は口径一三㎝程のもので小破片の残存であるため詳細については不明である。ともあれこれらの土器はいずれも室町時代後期から桃山時代にかけての特徴を有するものであり、前述の木製小塔より時代が下がるものと考えている。

8　木簡の釈文・内容

(1)　・「了無礙如彼卉木叢林諸薬草等而不自知
　　・「　　三　之　三　(345)×28×0.34　019

(2)　「上中下性如来知是一相一味之法所謂解　(310)×28×0.43　019

(3)　「脱相離相滅相究竟涅槃常■(じ)寂滅相終帰於　(342)×28×0.37　019

(4)　「空仏知是已観衆生心欲而将護之是故不　(342)×27×0.31　019

(5)　「即為説一切種智汝等迦葉甚為希有能知　(342)×28×0.22　019

(6)　「如来随宜説法能信能受所以者何諸仏世　(343)×27×0.31　019

(7)　「　法
　　尊随宜説難解難知尓時世尊欲重宣此　(345)×28×0.41　019

(8)　「義而説偈言　(350)×28×0.31　019

(9)　「破有法王出現世間随衆生欲種種説法　(349)×28×0.36　019

(10)　「如来尊重智慧深遠久默斯要不務速説　(351)×28×0.33　019

釈読できた柿経の内訳は、細幅両面写経一四三点、細幅片面写経一七点、広幅片面写経二一九点の合計三七九点である。但し、長さ二～三㎝の小破片をはじめ経文部分の欠損が著しいもの、一本として数えるには不適当なもの、あるいは土圧が抜けずに密着したままの塊状のものなどもいくつかあるため、その正確な出土点数は不明である。点数が厖大であるため、ここでは広幅片面写経の一部を例示して紹介した。妙法蓮華経巻第三薬草喩品第五のうちの一連の部分である。(3)には書き損じの訂正、(7)には脱字補入がみられる。

さて、この三種類の柿経を形態別に比較一覧すると、左表のようになる。筆跡は太字や細字、整った字や曲がった字など個性豊かなものが多く、書体は行書・草書・楷書を使用し、一人の仕事でないことは明白である。経典は法華経八巻二八品のみで、開結二経（無量義経・観普賢経）は解読したものには含まれていなかった。

慈恩寺遺跡出土柿経の形態別比較

写経方法	製作方法	写経面	長さ(㎝)（最長値）	幅(㎝)	厚さ(㎝)
両面	割り剝ぎ	やや粗い	二七・四	一～一・七	〇・〇三一～〇・一一
片面	削り剝ぎ	滑らか	一九・六※	〇・九～一・一	〇・〇一五～〇・〇四六
片面	削り剝ぎ	滑らか	四五・二	二・四～三・三	〇・〇一二～〇・〇六二

※完形品はなし

(1)表　(2)　(3)　(4)　(5)　(6)　(7)　(8)　(9)　(10)

（いずれも赤外線画像）

これらの点と全体をみた上で、分類整理した結果は次の通りである。

① 両面写経の場合は、一般的な二〇本一把を必ずしも厳守していないものもある。但し片面写経は一把の本数は不詳。

② 巻数・品題は法華経に該当し、他の経文は入っていない。

③ 広幅片面写経は校正が施されており、「皆校」「校」の記入がある。他の二種類も校正されてはいるが、整然としたものではない。

④ 番号記入がところどころ見受けられる。後の作業、例えば大把にする時などの煩を避けるためであろう。

⑤ 同じ経文を書いたものは細幅両面写経は二点、広幅両面写経も二点ある（細幅片面写経は数が少なく不詳）。このことから法華経の大把は四つ以上あったと推定されるが、実際の出土量は少なく腐蝕が進んでいるという事実は否めない。

なお、細幅両面写経に「南無阿弥陀仏」と六字名号が記入されたものが四点ある。

9 関係文献

滋賀県教育委員会『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書X－5－1』（一九八二年）

同『昭和五七年度滋賀県文化財調査年報』（一九八四年）

（石橋正嗣〈安土町教育委員会〉
河内美代子〈近江八幡市立郷土資料館〉）

岐阜・鷺山蟬（さぎやませみ）遺跡

1 所在地　岐阜市大字鷺山字西蟬

2 調査期間　二〇〇三年度調査　二〇〇三年（平15）六月～二〇〇四年三月

3 発掘機関　(財)岐阜市教育文化振興事業団埋蔵文化財調査事務所

4 調査担当者　朝田公年

5 遺跡の種類　集落跡・城下町跡

6 遺跡の年代　古代～戦国時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

（岐　阜）

鷺山蟬遺跡は独立小丘陵鷺山の東、長良川の北、鳥羽川の南に位置する扇状地上に展開する鷺山遺跡群を構成する遺跡の一つである。区画整理事業に伴い、二〇〇三年度から順次発掘調査を実施している。古代から戦国時代にかけての複合遺